

『絶叫委員会』

穂村弘

波那

ムロタ、眩しい奴。冥福を祈る。

『絶叫委員会』は、現代歌人で若手の第一人者である穂村弘氏の最新刊。

どこまでも紛糾の続く会議の議事録か、あるいは叫びの訝する不条理劇かと思わせる本書は、その題から連想される騒々しさに反し、端正で真っ白の艶やかな表紙に、ただ黒々と記された明朝体風の題字が生み出す静けさが、かえって不穏な空気を醸し出している。下方には小さな紅い文字でタテヨコに配された、破壊力さえ感じるようなナンセンスな表現たち、さらには本書の説明までもが付されている……！

町には、偶然生まれては消えてゆく無数の詩が溢れている。

不合理でナンセンスで真剣で可笑しい、天使的な言葉たちについての考察。

騒々しさと静けさと不穏と懇切丁寧が入り混じる、どこか謎めいた現代アートを思わせる扉を開くと著者選りぬきの迷言たちが並んでおり、穂村氏がコレクター兼ギャラリーのオーナーよろしく丁寧に説明を加えながら案内してくれる。あえて喻えればそんな感じだろうか。蒐集されているのは街のどこかしらに転がっていたパツと見、ありふれた表現たちなのだが、ほっとする間もなく脊髄反射的にじゅわーっと笑いの波が来るので、移動中や外で読む折にはくれぐれもご注意を！ 穂村氏の手にかかるそこに居合わせたような臨場感が生まれ、音声や映像を欠きながらも緊迫感やゆるみやおかしみが僅かな毒を含みつつひたひたと伝わってくるところが巧みだ。

「Nが生き返るなら、俺、指を4本切ってもいいよ」

「両手、合わせてだよ。それ以上はギターが弾けなくなるからさ」

（「パニック発言・その2」）

「彼が求めているのはメーターなんです。でも、あたしはメーターじゃない。あたしだってメーターが欲しい」

（「恋人たちの言葉・その2」）

いずれも一瞬「え？」と聞き返したくなる珍妙なことばだが、その言葉が発せられた切迫感と生々しいリアリティは前後を読めば確かに伝わってくる。理解や共感はできなかつたとしても、だ。生々しい表現が生まれた瞬間を、穂村氏は見逃さずにつかまえては『天使の呟き』などと名づけ、閲覧用に丁寧に並べてくれている。ヤクザの放ったひとこと、恋人たちや若者たちの何げない対話、広告や貼り紙のなかのヘンな表現――。一見ばらばらに見えるものに共通する、ありふれた日常を突き抜ける異様なズレを読者とともに楽しみながらも、それらを一本の線で結びつけているのは、時折微かに見え隠れする穂村氏の表現への強くて真摯なまなざしだ。（「結果的ポエム」、「そんな筈ない／ある」など。）

後半の天然を巡る考察がいい。あたかも宿敵というべき熱い執着で語られる「ムロタ」という同級生のエピソード（「名言集1」）。天然な人はどこか存在そのものが詩的で超越しているものだけれど、表現者・穂村氏がその彼への嫉まじきと憧れが嵩じて口走った「天使の呟き」的ひとことが冒頭の引用である。案内役であり、著者でもある穂村氏が突き抜ける瞬間までもがこっそりといつのまにか展示されていることに、思わず頬が緩む。

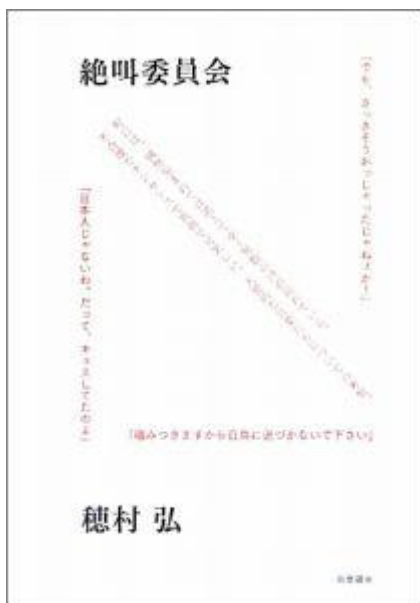
勢いのままにさんざん笑ったあとで、なぜ穂村氏が偶然に生まれては消えていくそうした生っぽい詩的な表現を集めて、本書のタイトルを付したのが、いまだ

大きな謎だったことを思い出す。手掛かりは既刊の『^{*}どうして書くの？』という対談集のなかに見つけられる。

意味がストレートに伝わりそして心を打つ、ないし為になる、役に立つ……そうした「分かりやすい名言」は本書にはほとんど収載がない。スポットが当たっているのは、暗黙の了解によってなりたっている日常的なコミュニケーションの、もっと深くにあるもの――想い嵩じてときに突き抜ける、ごく個人的な、逆るような想いの発現そのものだ。

場違いで意味の通らないこと、周囲の空気温度を著しく変える発現に対し「イミフ」・「KY」などと敬遠しがちな現代のある種の息苦しさのなかで、本書に集められたような、いわば論理的理解を超越するポエティック（天使的）な表現たちは、暗黙の了解の上に整えられた日常空間に、ときにやわらかく、ときに破壊的な波紋を呼び起こす力を宿している。その発話の瞬間のへりきみを「絶叫」と名づけ、へ名言たちの生まれ出る発現条件を伝えようという試みが本書……などと深読みを試みるものの、タイトルの謎は結局、明かされない。読者をニヤリ、クスリと笑わせる著者の玄人的な芸風と、その裏に巧みに隠された、著者のへことは表現に対する深い愛と使命感を感じながら幾度も読み返したくなる1冊。

*穂村弘対談集『どうして書くの?』(筑摩書房刊、2009年9月)はミュージシャンや、小説家や、歌人など表現者のプロ7人との対談。本書では微かに匂う程度だった穂村氏の表現者魂がくつきり濃密に感じられる作品。ご興味に併せて読まれることをお勧めしたい。



『絶叫委員会』

著者：穂村 弘
出版：筑摩書房 (2010/05)
1,470 円 (税込)

波那 (はな)

静岡県在住。夫十子ども2人の4人暮らし。

ネット書評家・五行歌人

2008年オンライン書店ビーケーワンに
wildflower名義で書評を書き始める。

2009年5月9日「書評の鉄人」

2009年10月16日「書評の鉄人列伝195回」

<http://www.bk1.jp/contents/shohyou/retuden195>

2010年3月9日 通算書評数200本達成。

隔月刊誌『グランパピエ』に書評の連載中

本を読むだけでなく、
読んであげるだけでもなく
何か、もっと先へ。
そう思って始めました。
食事と同じく、
読書は私たちの栄養に
なってゆくもの。
私の評は、その美味しさの
一滴をお伝えするために
在ります